

<報告>

「井上郷子ピアノリサイタル#31 星谷丈生・黒田崇宏作品集」の報告

Report on the Recital “Piano Works by Takeo Hoshiya and Takahiro Kuroda” Played by Satoko Inoue

井上 郷子
INOUE Satoko

星谷丈生（1979-）と黒田崇宏（1989-）は、中堅～若手の作曲家の中でも数少ない、既成の作曲技法に安住せず自身の音楽のスタイルと聴取の在り方を探求し続けている作曲家である。筆者は、2022年3月6日、東京オペラシティ・リサイタルホールにて「井上郷子ピアノリサイタル#31 星谷丈生・黒田崇宏作品集」を開催した。ここで演奏した2020年から2022年にかけて作曲された最近作3作品（星谷作品2曲、黒田作品1曲）のうち2曲がピアノ拡張奏法を用いた作品であること、委嘱作品2曲が演奏に40分近くかかる大作であることなど、結果的に実験的な要素を含む演奏会となった。両氏が自身の音楽に何を聴き、そこから何を見出しているのか、実際に音を紡いでいく際の時間と空間に対する関心の在り方、具体化するためにどのような作曲の方法をとっているのかなど興味深いことが見出された。

キーワード：現代音楽、ピアノ独奏曲、ピアノ拡張奏法、プリバードピアノ

1. 本研究（演奏会）の企画意図とこれまでの経緯

本研究であるリサイタルは、筆者が1991年より基本的に年1回のペースで続けているソロリサイタルシリーズの31回目の公演である。今回は、1979年生まれの星谷丈生氏、1989年生まれの黒田崇宏氏という中堅、そしてより若い世代の作曲家の作品を取り上げた。

今回のコンサートを含み、1991年よりこれまで32回（2011年には2回行った）開催した、このリサイタルシリーズにおいて演奏した曲はのべ225曲にのぼる。取り上げた作品の作曲者のうち最も早く生まれたのは日本の現代音楽のパイオニアである松平頼則（1907-2001）氏であるから、今回取り上げた1989年生まれの黒田氏は、松平頼則氏から見ると、数世代若い作曲家、ということになる。そういう意味では、このリサイタルシリーズからは、国内外の現代ピアノ作品の歩みや流れを読み取ることができるとも言える。

さて、筆者が初めて星谷丈生氏の作品を演奏したのは、2011年2月、《ピアノのためのスタディⅧ―転回と持続―》の初演である。更に2021年1月、プリバードピアノのための《Platycodon》を初演し、他にもカナダやドイツを含め様々な機会を得てこれらの曲の再演を行ってきた。一方、黒田崇宏氏の場合は2021年1月、プリバードピアノのための《Fragment》の初演が最初である。

このふたりに共通することは、自らの美学に基づき、独自の書き方で音楽を実現化していることだが、当然のことながら、ふたりの音楽は、構成法も音響特性も異なる。両者の作品を並置して演奏することにより、両者それぞれの音楽をよりはっきりと提示することができ、共通するものも異質なものも見えてくるのではないかと考えた。

尚、本研究を実施するにあたり、2021年度国立音楽大学個人研究費特別支給を受給した。

2. 星谷丈生、黒田崇宏について

星谷丈生、黒田崇宏のプロフィールについては、本研究（演奏会）のプログラム（2022年3月6日）に、彼ら

自身が以下のように記している。

星谷丈生

作曲家。東京藝術大学作曲科及び、博士課程音楽領域研究科修了、博士号取得。多久潤一朗、多井智紀らとともに、室内アンサンブル「アンサンブル・ボワ」を結成し、2000年代には多くの新しい音楽を紹介した。主な活動として2005年アンサンブル・ノマド英国公演に参加、2007年サルヴァトーレ・マルティラーノ賞第1位、2010年武生国際音楽祭招待作曲家、2011年ロワイヨモンセミナー（フランス）参加、2013年テグ国際音楽祭招待作曲家、2014年カフェ・ブダペスト（ハンガリー）参加、2017年日加現代音楽交流プロジェクト参加、2019年 Ongaku Festival (Toronto)、2020年 Music from Japan (New York) など。作曲家グループ Path 同人。2010年よりチェリストの多井智紀とともに企画団体「時の形プロジェクト」を開始し演奏会やCD製作等を行っている。またクラリネット奏者の菊地秀夫とともに、音楽ユニット「オフィスでく」を結成し活動している。2020年度より音楽企画団体「庭園想楽」のメンバーとして様々な企画を行う。

現在、福井大学教育学部准教授。1979年生まれ。福井市在住。

黒田崇宏

1989年5月2日、富山県生まれ。神奈川県で育つ。

近年は音と沈黙が存在することやそれらの関係性について考え、更にその思考から生まれる作曲作品における時間の在り方や変容について関心がある（但し、この関心を適用しない作品も作ることもある）。

東京藝術大学卒業、同大学院修了、その後グラーツ国立音楽大学修士課程で研鑽を積む。作曲を井元透馬、松下功、福士則夫、近藤譲、鈴木純明、Klaus Lang の各氏に師事。

第29回現音作曲新人賞（2012年）、第37回入野賞（2016年）等を受賞。2019年に Music From Japan Festival 2019の委嘱作曲家の一人としてニューヨークに招待される。

両氏のプロフィールからは、活発な作曲活動を行っていることが窺える。そして、星谷氏は作曲活動のみならず、演奏会の企画を含む総合的な視野を持った音楽活動を積極的に行っている作曲家であると言える。

3. 本研究（演奏会）での各演奏曲について

本研究（演奏会）では、星谷丈生作品を2曲、黒田崇宏作品を1曲、演奏した。当初は、委嘱作品を含む演奏時間10分ほどの作品をそれぞれ3～4曲演奏するつもりであったが、2021年秋に書き下ろされた黒田氏の新曲が演奏に40分以上かかることがわかり、また、星谷氏の新曲も35分くらいになる予定、ということで両氏との相談の結果、黒田氏の作品は新曲1曲のみ、星谷氏の作品は、プリエアドピアノ作品と新曲の2曲、ということでプログラムを組むことにした。演奏した曲は以下で、星谷作品の間に黒田作品を挟む、という曲順でプログラムを構成した。

星谷丈生 Platycodon (2020)

フィクションの創造～シム・ヒョジョンの追憶に～ (2022) 委嘱作品・初演

黒田崇宏 von Grau umrahmte Stille (2021) 委嘱作品・初演

次に、各曲について述べていく。

星谷丈生《Platycodon》(2020)

この作品は2021年1月17日、23日、24日に両国門天ホールで開催された「未来に受け継ぐピアノ音楽の実験コンサート」で筆者によって初演された作品である（この作品は1月24日に演奏）。「未来に受け継ぐピアノ音楽の実験」とは、ピアノ拡張奏法（ピアノの内部奏法、プリペアドピアノなど従来の鍵盤を弾いて演奏する奏法から拡張された奏法）に関するプロジェクトで、2018年から2022年にかけて、作曲家、演奏家、音楽学者、ホール管理者がそれぞれの専門分野から研究、実践し、ワークショップ、コンサート、勉強会、シンポジウムなどを行ったものである。伊藤祐二（作曲家）、井上郷子（ピアニスト）、庄野進（音楽学者）、黒崎八重子（両国門天ホール代表）が中心メンバーとしてプロジェクトを進めた。この「未来に受け継ぐピアノ音楽の実験コンサート」は、日本の作曲家21人にピアノの拡張奏法による作品を委嘱し、それらの作品の初演をした3日間のコンサートで、このプロジェクトの、いわば、一つの集大成とも言えるものである。

さて、星谷氏の《Platycodon》は、プリペアドピアノのための作品である。プリペアドピアノとは、通常の奏法で演奏した時に、新しい音色や音高が生み出されるように、通常は弦の間に物が取り付けられたグランドピアノのことを言う。そして、どの弦にどのような物（材料）を弦のどの辺りにどのように挟み込む（取り付ける）かを、「プリパレーションする」或いは「プリペアする」と言い、挟み込まれた（取り付けられた）状態そのものも「プリパレーション」と呼ぶが、星谷氏は《Platycodon》のプリパレーションについて次のように指示している。

挟み込む物（材料）とそれらを挟み込む弦（左に音名で記している）

E^b・・25セントのカナダ硬貨

F[#]・・割り箸

G・・20セントのユーロ硬貨

C¹・・25セントのUSA硬貨

D^{b1}・・1ユーロ硬貨

E^{b1}からC^{#2}にまたがるように・・ステンレス（もしくは同類の金属）の定規

この他に、楽譜のインストラクションには、材料が挟み込まれた弦に隣接する音の弦に、その材料を接触させるかどうか、挟み込んだ弦の音を弾いた時、どの倍音の音が含まれて鳴り響いてほしいか、また、E^{b1}からC^{#2}にまたがるように挟み込んだ金属定規の振動効果により、この2音間にある3つの音がトレモロ的な響きをするように、などが書かれている。つまり「どのような材料をどの弦のどこに挟み込むか」というプリパレーションの指示のみではなく「こういう音響が得られるように、これらの材料をこれらの弦に工夫して挟み込んでほしい」という指示となっている。

この曲は、ほぼ毎小節ごとに、5種類の異なるテンポ（♪=33、♪=50、♪=75、♪=113、♪=169）の指示が記載された断片が並列的に配置されている。演奏するにあたり、奏者はそれらを単に異なるテンポで演奏するだけではなく、任意に音楽的なムードを変化させて演奏しなければならない。その意味では、テンポの指示は細かく厳密に書かれているとはいえ、あくまで目安である。本研究（演奏会）のプログラムノートには、星谷氏はこのことを「時間的な入れ物（この場合はテンポが該当する）だけは指定されているが、その中にどのようなムードを入れるかは、演奏家に完全に委ねられている。その結果、並置されたそれぞれの断片は対立し、時には介入し合って連鎖的に続いていく。」と書いている。星谷氏は、音楽学者のチャールズ・ローゼンの *Music and Sentiment*（邦訳『音楽と感情』）を読んで以来、音楽における感情の在り方について考えてきたと言うが（本研究（演奏会）のプログラムノートによる）、この作品はその思考の延長線上に位置するものであると言うことが

できる。尚、曲のタイトルの *Platycodon* は、「キキョウ属」を意味するとともに、「広い釣鐘」を表す言葉である。星谷氏が語る「時間的な入れ物」のイメージであろうか。

黒田崇宏 von Grau umrahmte Stille (2021)

この作品は、プリバードピアノのための作品で、更に、数種類の内部奏法を含むピアノ拡張奏法を用いて演奏される。

この曲のプリバレーションは、予め最高音域から最低音域にかけての16音に、ブル・タック等の粘着ラバーを弦の最も端の部分に粘着させておく。そして、曲が進んでいくにつれて曲の途中で頻繁に、新たな粘着ラバーを新たな弦に着けたり、取り除いたりする。弦の最も端に粘着させる粘着ラバーによるプリバレーションは、響きをミュートする効果があり、音量は小さくなるが、元の音の音高は比較的、保たれる。ピアノの内部奏法は3種類が用いられている。弦上の第2倍音が出る位置を指で軽く触れた状態で、鍵盤上でその音を弾くことにより1オクターヴ上の音を出すハーモニクス、指で弦をはじいて音を出すピツィカート、指で弦（弦の最も端の部分が良い）を押さえ、押さえられた弦の鍵盤を弾くミュートの3種類である。更に、音が鳴らないように鍵盤を押さえ、ペダルを踏みかえて共振を得る奏法も含まれている。

曲は♩=40、♩=36、♩=26という3種類のゆっくりしたテンポで、ほとんど聴こえるか聴こえないか位の小さい音量、つまり *più pppp*、*pppp*、*pp* で推移していく。ごくたまに最低音域で *ff* が鳴り、曲尾の約3分間は *ff* で鳴らされる最低音域の音が次第に増えていく。

黒田氏は自身の音楽について、本研究(演奏会)のプログラムノートに次のように書いている。「現在の私にとって私の作る音楽作品の多くは音を空間に置いていくような感覚を持っています。そして、音楽の構成要素である何かしらの音や音の連なり、音（の連なり）とそれ（ら）の間にある休符（沈黙）が空間に置かれていき、それらが堆積していくことで、一つの音楽作品を作っているというイメージがあります。しかし、音や沈黙が堆積すると言っても、それらは目に見えるものではなく、過ぎ去っていくものです。ここで述べているそれらの堆積というものは聴き手の記憶に委ねられています。つまり、聴き手が意識的にしろ、無意識的にしろ、聴いた/体感した/体験した音や沈黙が彼（女）らの記憶に蓄積されていき、それらが彼（女）らのいる空間の中において一つの像のようなものとして認識されることで、音楽として知覚される、ということです。」

星谷丈生 フィクションの創造～シム・ヒョジョンの追憶に～ (2022) 委嘱作品・初演

この作品も40分近い演奏時間を持つ。

タイトルにあるシム・ヒョジョン氏は若くして亡くなった音楽学者で、モートン・フェルドマン作品の研究で優れた研究論文を残している。星谷氏は、この曲の構成法について、シム氏の論文を読んだことがきっかけとなって着想したアイデアを用いており、「それは、音のパターンを楽譜上で空間的に捉えて全体を構成する方法である。」と本研究(演奏会)のプログラムノートの中で述べている。具体的には、一つあたりが1～2小節から成る断片、それは、どこにでもあるような一種の音楽的慣用句のように見えるが、それらを接ぎ木のようにつなげて曲は作られている。これらの「音楽的慣用句」は、前後につながりを持ちつつも、異質なものであることが認識できるように、或いは、安易に接続することができる類似した慣用句どうしでは、それぞれ（または片方に）変化を加えることで前後が容易につながらないようにして構成されている。更に、それらを再構成させることによって曲は作られている。星谷氏は、「私がこの方法（音のパターンを楽譜上で空間的に捉えて全体を構成する方法）を用いている理由は、全体的な構成が部分の進行速度に対して干渉し、音楽の進み方をより緩慢にコントロールするためである。前者の“接ぎ木”による断片の構成と、後者のマクロ的視点による空間的な構成は、一つの作品の中で対立している。私は、一つの長い持続の中で、様々な矛盾や葛藤が共存する音楽を実現し

たかったのかもしれない。」と述べている。(本研究(演奏会)のプログラムノートより)

4. まとめと今後に向けて

今回の研究(演奏会)は、星谷、黒田両氏への委嘱作品(世界初演)を含むプログラム構成を通して、作曲家が演奏家に新作を委嘱された場合、普段はなかなか書くことができない演奏時間が長い作品を書き、演奏するという、作曲家にとっても演奏家にとっても、ある種、実験的な要素を持つコンサートとなった。

また、両氏ともに、作品にはピアノの拡張奏法を用いている。特に、星谷氏の《Platycodon》は中音域に金属を使用したプリパレーションの指示があったため、この作品を演奏するためだけにピアノ(ヤマハ、フルコンサートグランド)をレンタルした。本研究(演奏会)の準備として、予めレンタル会社のピアノの保管倉庫で、星谷氏と時間をかけてプリパレーションを試し、材料と挟み込む弦の場所をほぼ決めた上で、オペラシティの舞台でのゲネプロに臨んだ。ゲネプロでは念入りにプリパレーションを決定し、多彩な音色を生かすような演奏法を何度も試して音色を作っていた。初演時は小さなスペースでの、楽器もスタインウェイの小さなピアノであったため、今回のフルコンを使用したホールでの演奏は、音色の多様さと響きの広がりという点で、全く異なる曲のようにも思え、ピアノ拡張奏法の魅力を改めて知らされた。そして、このように、リハーサルや多くの対話を通じて作曲者と演奏者とが共に音楽を作り上げていく、という、音楽創造にとって重要な段階を踏むことができたことは、作曲家、演奏家双方にとって大変幸せなことであった。

また、今回の演奏会(本研究)のプログラムノートには、星谷、黒田両氏に、演奏曲目についてのノートのみならず、自身の音楽、作曲に着いて自由に書いていただいたが、興味深かったのは、両氏ともに「音楽的時間」についての考えを述べていることであった。

黒田氏は次のように書いている。

「…音楽は時間芸術であるということについて考えてみると、短い音が一音ずつ鳴っていくのを聴くにしろ、多くの音の重なりで生まれる音響の移り変わりを聴くにしろ、聴き手はそこで様々な音の持続(長さ)を聴くことで、時間やその変化というものを感じ、己の体験とするということが音楽であると言えるかもしれません。

そのことを踏まえた上で、更に私は空間(つまりその音楽が演奏される場所)や、聴き手の記憶というものにも目を向けて音楽作品を作ろうとすることが多いです。」

「願わくは、時間の経過とともに音が置かれ、蓄積されていくことで空間が変容していく様を幻視できることを。」

一方の星谷氏は、モートン・フェルドマンの、演奏時間が1時間以上あるピアノ曲における筆者の演奏についての考察を述べた後、以下の様に結んでいる。

「…その点で、井上さんはこうした時間をコントロールすることができる稀有な演奏家の一人だと私は考えている。彼女は音の響きの隅から隅まで気を配りつつ時間に寄り添って着実に進んでいく。

最初から最後まで一本の強い軸がピンとはっているようなこの感覚は、今回私が新作《フィクションの創造》を作曲する上で大いに参考になった。私はこの感覚を新作の作曲に生かすことができないかと考えた。私の作品には30分以上の比較的長い作品がいくつかあるが、今回はそのどの作品とも違ったアプローチで作曲をした。時間を追い越しすぎないように、そして何より本当の意味で退屈にならないように、情報をコントロールして停滞した時間をしっかりと自分自身が楽しみたいと考えていた。私はピアノをできるだけよく響かせることができるように、ゆっくりと作曲をすすめた。」

以上、本研究(演奏会)で演奏した星谷丈生と黒田崇宏のピアノ作品がどのようなものであるかを考察してきた。彼らが自身の音楽に何を聴き、そこから何を見出しているのか、実際に音を紡いでいく際の時間と空間に対

する関心の在り方、具体化するためにどのような作曲の方法をとっているのか、など興味深いことが見出された。

今後、ふたりの作曲家がどのような作曲活動を継続していくのか、筆者は演奏家の立場から立ち会っていききたいと考えている。

本研究は、2021年度国立音楽大学個人研究費（特別支給）によって実現した。助成に対して謝して記します。

参考文献

Rosen, Charles. *Music and Sentiment*. Yale University Press, New Haven and London, 2010.

チャールズ・ローゼン 『音楽と感情』 朝倉和子（訳） 東京：みすず書房 2011年